

## 北京の茶菓子

東安市場の古本屋で一冊日本の文章家五十嵐力の『我が書翰』\*を買った。中に東京の茶菓子屋のお菓子はどれも美味しくなくなった、ただ何軒かたとえば上野山下の空也など、まだいい菓子で、食べると餡と砂糖それに果実が渾然と融和し、舌先ではそれぞれの味を見分けることができないと書いてある。徳川時代江戸二百五十年の繁華を考えると、こうした享楽の流風余韻が今日まで留伝しているのは当然である。京都と比べると無論いささか及ばないけれども、北京は建都してすでに五百余年の久しきにわたる。理屈から言えば衣食住の方面に幾らかなりとも精緻な成績があるべきである。だが実際には決してそうではない。例えば茶菓子について言えば、何か特別な滋味のあるものを知らない。もちろんわれわれは北京の状況についてそれほど知り尽くしているわけではない。ただ行き当たりばったりに入った菓子屋で少し買って食べるに過ぎない。しかし飛び込んだ経験からすれば、要するに美味しいお菓子に出会ったためしがない。まさか北京によい茶菓子がないわけではないだろう。それともあってもわれわれが知らないのか。これも必ずしもすべてが口腹の慾を貪らんがためではない、古い都の中に住んでいて歴史の精練あるいは頹廢を含むお菓子の一つも食べられないなどとはとても大きな欠陥だと思う。北京の友人たちよ、わたしに二三軒上等のお菓子を作る店を教えてください。

わたしは二十世紀の中国産品について、それほど好きではない。粗悪な模造品が、その名を飾って国産と言い、外国製品よりずっと高く売ろうとする。新しい建物で売れる物は、どれも皆どうも疑わしい。そう言う遺老の口吻のようであるけれども、総じて風流享楽の事については、わたしはすこぶる伝統を盲信しているのである。西四牌樓の南を歩いていて、異馥齋の一丈ばかりの一枚板の看板を眺めながら、思わずふらつとなった。それが義和団以前の老舗であることを表しているだけでなく、その消えかかって薄暗い文字の跡が又わたしに香を焚き静坐した安閑として豊かな生活の幻想を呼び覚ましたからである。わたしは香など焚いたことはないが、こうした事にはとても興味がある。しかしながら結局は香屋に入る勇気がない。というのは彼らが香合の上ですでにオーデコロンやサボンを置いているかもしれないから。われわれは日用に必需なもの以外に、もうすこし無用の遊びと享楽があつてこそ、生活が面白いのである。夕陽を見、天の川を見、花を見、雨を聴き、香をかぎ、渴きを解くのではない酒を飲み、腹を満たすのではないお菓子を食することは、いずれも生活に必要なのである——無用の飾りではあるけれども、精練されていればいるほどよい。可哀想に今の中国の生活は、極端に乾燥粗野である。他のことは言うまい、わたしは北京を彷徨すること十年、ついに未だ美味しいお菓子を食ったことがない。（民国十三年二月）

※初出：1924年3月18日『晨报副刊』

---

\*『我が書翰』五十嵐力著（至文堂書店1916）「文展と空也」文意が少しく異なる。